

## 実践的対話への糸口——コメント——

今回のシンポジウムは、神野志隆光氏の説得力ある刺激的発言、「記紀の日本思想史は国文学によってこそ可能となる」および「テキストの自己運動」といった二つの陳述をめぐって、問題軸が設定され議論が展開されていったと筆者は理解している。以下、この神野志発言をめぐって展開された議論を筆者なりに再構成するかたちで述べてみたい。神野志氏は記紀研究を代表する国文学者であるが、倫理学・思想史系の研究者を中心に構成される日本思想史学会においては決して学問的な主流ではない。であるとすれば、国文学とはテキストに対する読みの徹底であると立場を鮮明にする神野志氏にたいして、倫理学・思想史系の研究者たちがどのように応答していくのか。その点に、宗教学者の筆者も含み込んで、学際

### 磯前 順一

的な編成をした今回のシンポジウムが稔りあるものになりえたのかどうか、委ねられていると思われる。もちろん、学際的なシンポジウムとは学問分野を異にする研究者の対話の場であるわけだから、自らの帰属する学説を自明視することで、他分野の研究者との討議を欠落させて、自分の学問原理の卓越性を主張することは生産的ではない。神野志氏の言わんとすることは、自らの学問分野の構成原理に徹底して自覚的な研究者こそが、他分野の研究と有益な討論を行ない得るということであり、それは国文学の既成の方法を自明視することなどではなく、自分の帰属する学的原理との意識的な対峙をおこなう作業を個々の研究者が済ませたうえで、学際的な討論は初めて意味を持ち得るということなのである。そ

の意味で、半世紀前に石母田正が古代史研究の展開について述べた次の言葉は、今回のシンポジウムの在り方にも依然有意義な問いを投げかけるものとなっている。

古代史の全体的統一的把握は一挙に果たし得るものではないし、また果たされてはならない。それは個々の問題がその背後にある法則的普遍的なものとの把握に達するまで深刻に掘下げられた場合にのみ全体との生きた連関を恢復して来るのである。「古代

研究の回顧と展望 昭和十八年度」

研究者自身とその拠って立つ学的言説との間に存する緊張関係性がどれほどのものであるかによって、学的言説を異にする他分野の研究者に対してどれだけ説得的な発言ができるのかが決まってくる。そして、このシンポジウムの聴衆もまた、自分が個人的に関心のある個別発表だけを切り取って傍聴するのではなく、異なる分野の報告が三本重ねあわされたときに、その言説空間にどのような主題が浮上し得るのか、コメントイターを含めた五人の研究者がどれだけ異なる分野の研究者との討論の場に自らを曝し得たのか、この地平においてシンポジウムの成否を問うべきであろう。

このような観点に立つとき、今回のシンポジウムは筆者にとって二つの問題を提起するもののように思える。

ひとつは、神野志氏と前田勉氏のあいだで展開された、記紀というテクストをいかに読むかという問題である。両氏ともに記紀解釈史と切り結ぶかたちで研究発表を行ったわけだが、神野志氏が「記紀というテクストとその注釈者」がどのように直接的に向かい合ったかというテクストをめぐる我々という一二人称関係で自らの方法を明示したのに対して、前田氏は「記紀の注釈者とその社会」というかたちで、テクストがその成立当初の意図とは関わりなく、社会にどのように分節化されていったのかという、神野志氏の言う「テクストとその注釈者」の関係を取り巻く「社会状況」という第三項をさらに加えた視点を提示した。そこで神野志氏が前田氏の方法で懸念される点として指摘したのが、社会状況という第三項を安易に持ち出すならば、注釈者が記紀というテクストに直接的に向き合ったリリティ、そこで彼らが記紀から何を讀み取ったのかという内容が等閑視され、テクストの讀みとは別箇に予め答えの出ている個人の世界観などへと議論が回収されてしまうのではないかということであった。たしかに前田氏の方法はそのような疑問を惹起する側面を有するものの、安易に記紀の注釈を社会状況の反映物とするものではなく、社会状況と注釈者の世界観との振れから、歴史的始原へのノスタルジア

が喚起されるといった視点を含んでいる。すなわち前田氏の方法においても、「テキストとその注釈者」の緊張関係に十分に注意が払われるのであれば、その一二人称関係がどのように個々の社会状況のなかへと分節化されていくのか、テキストの担い手も予想し得ないような、テキストが社会に受肉化されるときに引き起される振れに焦点を当て得るものとなると予想される。

まさにその点で、神野志氏の言う「テキストの自己運動」とは、記紀解釈の問題を注釈者の世界観に還元するのではなく、むしろ注釈者を介して記紀というテキスト自体が多様な状況のもとに散種されていくことを捉えた言葉であり、記紀解釈史を貫く原理として、神野志氏と前田氏の提出した二つの視座、「テキストとその注釈者」および「注釈者とその社会」が縫合された地点で真に把握可能になるものと考えられる。なぜならばテキストの自己運動とは、解釈者を介してテキストが社会状況の中へと散種されていく脱構築的過程にほかならないのだから。次のジャック・デリダの発言はその運動の動態を的確に説明するものである。

人が自分の名前を散種するのでもなければ、人が自分の名前と戯れるのでもないのです。固有名詞の構造が、それ自身のうちにこうした〔散種、戯れの〕プ

ロセスを巻き込んでいるので。……私の名前を散種し、喪失しつつ、当然のことながら、私はますますそれをしやばらせ、私が場全体を占め、したがって「失われた」私の名前に見合った恩恵にあずかるようになります。（『他者の耳』）

であるとすれば、神野志氏と前田氏の討論を通して、このシンポジウムは単に異なる分野の研究者が個別発表をおこなったのではなく、国文学と思想史の方法をそれぞれ徹底させることで、その交差点にどのような主題設定が可能になるのかを示唆したものとと言える。このような「テキストの自己運動」として記紀解釈史を措定しえたときに、神野志氏と筆者とのあいだで取り交わされた問い、「何ゆえ記紀は千三百年もの間、読み継がれてきたのか」という問題が、歴史的起源へのノスタルジアをめぐる問題として浮かび上がってくることになる。ここにおいて、日本思想史の研究が、なにゆえ記紀解釈史を主題として取り上げなければならないのか、その明確な回答が得られることになる。

そして、この地点においてこそ、もう一人の発表者である清水正之氏から提起された問い、「はたして記紀はそれほど熱心に読まれていたのか」。すなわち、シンポジウムの主題「転生する神話——『日本思想史』は描きう

るか」を、神野志氏や前田氏のように「記紀」解釈史の問題として、そもそも受け止めてよいのかという核心的な問いは受けとめられるべきである。清水氏はその報告において一貫して「記紀」という言葉を用いず、「神話」あるいは「日本思想史」という言葉を軸として話を展開した。そのために、神野志氏や前田氏と議論を交わすことがなく、一見、シンポジウムの成功が損なわれたような印象を与えたと思われるが、もう一步踏み込んだ事態の捉え方をするならば、清水氏との報告のかみ合わなさ自体が、シンポジウムの主題である「転生する神話」を記紀論にひきつけて問題設定すること自体への強烈な批判として積極的に意味づけられるべきものであったと考えられる。司会の荻生茂博氏が指摘していたように、このシンポジウムで言及対象になっていたのは、実は「記紀と神話と古典」という三種類の範疇の混交体であり、それぞれが各報告者の思い思いのかたちで想定されていたのかもしれない。だとすれば、この措定対象のぶれ自体がシンポジウムの主題として論議の俎上にあげられなければならないのである。記紀解釈史という問題設定が本当に現代において切迫した問題であり得るかという清水氏の疑問を受け止め、シンポジウムの主題である「転生する神話——「日本思想史」は描きうるか」がどの

ように論じ得るものなのか、会場の聴衆を含めて、根本的な次元で問い直されなければならなかったのである。その意味で、近代の知識人において記紀は直接的なノスタルジアの対象とはなりえず、神話という概念あるいは近世の記紀解釈者への関心を介してのみ顕現し得るとした清水氏の発言は十分に顧みられる価値を有している。ただし、記紀という主題設定に対する清水氏の根源的な問いかけは、氏自身の報告に対する説明責任をも要求するものでもあろう。清水氏の言うところの「神話」や「日本思想史」というものがいかなるものなのか。どのような含意のもとに用いることで、どれほどの有効性をもち得るものなのか。異なる学的言語を用いる神野志氏や前田氏に対して、みずからの認識地平を自明視することなく、彼らの批判に自己の学問を曝していくことも必要となる。記紀あるいは神話というテクストと同様に、私たちの発話自体が他者の批判的判読に自由に委ねられるテクストでなければならないのだ。学会のシンポジウムという、研究者にとっての日常実践の場においてこそ、我々が自己批判の契機として他者と向き合うことがどの程度なし得ているのかが問われているように思われる。遠さは身近さにおいて確証されなければなるまい。

(日本女子大学助教授)